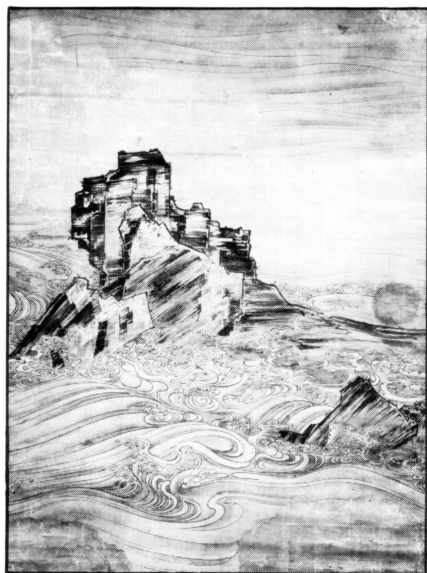


—かえるの命に手を合わせることが—

念々称名

常懺悔

(善導大師のおしえ)



波 濤 図 (長谷川 等伯筆)

現代の教育は、こども達に生命・科学・することを教えることはあつても、その生命に対する畏敬の念を教えることはありません。人間はもとも他の生命を殺し、犠牲にすることなしには生きて行けず、私たちは生きていくこと自体、罪を重ねておりますのに……

だからこそ、生きとし生ける者すべてに、「あなたのおかげです」と合掌するとき、生命の尊さと生かされていることの歡喜とが、しみじみとうなづかれるのです。

善導大師はここを押さえておっしゃいます——

数えきれない多くの生命によって、ちっぽけなこの「私」の生命が保たれているという感謝の心が、「おかげさま」という念仏の声となって出て来なければならぬと。

— 人生の旅がおわれれば……

南無とは

帰命なり

(善導大師のおしえ)



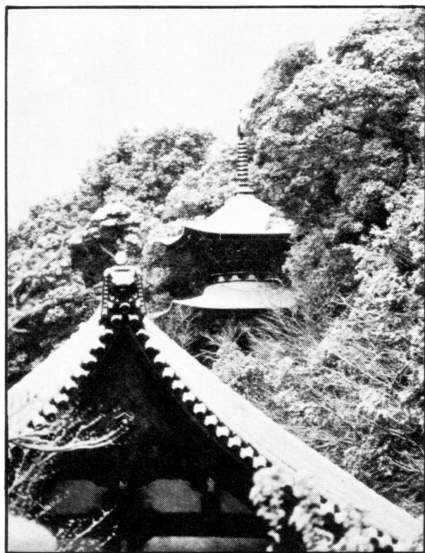
金銅蓮華文磬^{けい}(国宝)

仏さまは私たちに「南無」のころをお示しになるために八万四千の法門をお説きになつたといつてもいいと思います。

南無とは帰命——「大いなる命に帰る」とだと善導大師は示されています。私には二人の親があり、その親にもまた二人ずつの親がある。今ここに私一人が存在するために、

無始以来、一体いく人の親がいてくれたことになるのでしょう。数えきれぬほどの親の命、親のねがいがあつて、そして「私」がいるのです。その「私」も、いつか親や先祖が帰つていった大いなる命の中へ帰らせてもらうのです。

わたしたちの人生の旅がおわれれば、無量寿という限りない命の中へ帰つてゆくのだと思ひ定めるところが「南無」であり、同時に仏さまとの出会いでもあるのです。「南無」とは、限りある「私」の命と限りない永遠・絶対の仏のいのちとを結びつける唯一のものなのです。



雪の永観堂

一一の誓願は

衆生のためなり

善導大師ご法語

みずから覺りを得て仏となろうとするならば、それに伴なう誓願と修行とを成し遂げなければなりません。とすれば、そこに既にできる人・できない人の別がでてきます。できる人はよいですが、できない人はどうすればよいでしょうか。そんな人にこそ、道しるべを明示してくれる「誰か」が必要ではありませんか。

阿弥陀仏は、まさしくこの「誰か」なのです。煩悩に紛れてどうすることもできない私達を一人もささず救い取ること、を自己の誓いとなして（これに四十八あります）、その実現を果された唯一の仏なのです。

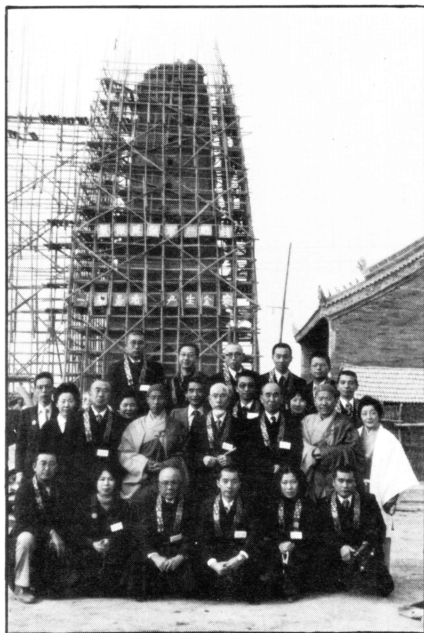
阿弥陀仏の誓願、阿弥陀仏という名、どれをとっても、一つとして私達を離れたものはないのです。

仏法に入るの門、

同じからず。

八万四千ありと。

—— 善導大師ご法語 ——



中国西安香積寺善導大師墓塔前で

小さな川、大きな川の区別なくそれらは最後には大海にそそぐというように、私たちが仏教に入っていく入口はたくさんあります。

しかし仏教の究極の目的には何ら変わりはありません。ただその最終目的に到達するまでの道のりが異なるだけです。その異った道のりに優劣をつける法論がかってありました。が、それは「どちらが勝っても釈迦の恥」といわれたようにどれも

みな仏教はお釈迦さまのみ教えなのです。み教え自体に優劣はありません。ただ言えることは、私たちにはどの道がぴったりしているかということです。私たち衆生にとって阿弥陀仏の「誰人も救わずにはおられない」という本願大慈悲に摂せられるという念仏往生の道が一番合っているのだ、と善導大師も法然上人も言われるのです。



玄中寺全景

慧日 えにち 世間 せけん を照らして

生死 しょうじ の雲を消除 しょうじょ す

往生礼讃

深海魚ひかりに遠くすむものは終に
眼 まなこ を失ふとあり 堀口大学

光もとどかぬ海の底に暮す魚は、用の
ない目が退化して、なくなってしまうそ
うだ。

私たちは、自分の目が光を見ていると
信じて疑わない。だがよく考えると、光がさ
すからこそ目が働き、その目も、光があるか
らこそ出来たのではないか。光に包まれて暮
しているうちに、思いあやまってしまったの
だ。

佛の光（慧日）に照されているのに、その
光が見えなくなり、佛の声の中にいるのに、
その声が聞えなくなる。

私たち現代人は、心の目も、心の耳も退化
した深海魚ではないだろうか。

「本誓重願虚しからず。」
ほんぜいじゅうがんむな

衆生称念すれば必ず往生を得。」
しゅじょうしゅうねんかなら

——善導大師『往生礼讃偈』——



アジャンタ第26崖の涅槃像

「私が仏になったら、西方浄土へ生まれたいと心から念仏を称えたものは、必ず往生させる」と誓われた阿弥陀仏の誓いは、けつしてウソや虚構ではない。念仏を称えれば、必ず往生できるのだ、という力強い宣言を、二千数百年前の釈尊以来、印度、中国、日本と、どれだけ多くの先師がたが説いてこられたことでしよう。

この簡潔で力強い宣言を、疑い、信じようとなないのが現代人なのです。そのくせ、テレビのCMや、政治家のウソ八百を、いとも簡単に信じてしまうのも、現代人なのです。

私たちの現代文明は、信すべきものをまちがって、ますます奈落の底へ沈んでいくのではないのでしょうか。

まず「信」を考え直してみましよう。

念^{ねん}々^{ねん}時^ぢ中^{つゆう}

常^{じょう}懺^{ざん}悔^げ

善導大師のおしえ



高祖善導大師千三百年大遠忌法要

常に没し、常に流転してやむところのないこの人間の体、人間の命というものはもろくてはかないものです。

そと目には努力精進しているように見えても、心の中では何を考へているかわからない人間。

六時礼讃は佛の徳を讃えると共に、真剣に礼拝して自分自分の罪を懺悔する行である。

み佛の大悲の中ですべて生かされている私と知ったら、至心に懺悔し、感謝せずにおれない。

佛祖の加護のもと高祖善導大師千参百年大遠忌法要は盛大に終了した。

おごりの心があつては高祖善導大師に申し訳ない。静かに懺悔の眼をとじた時、みかえり編集に努力執筆された方々に無限の感謝の念がわいてくる。

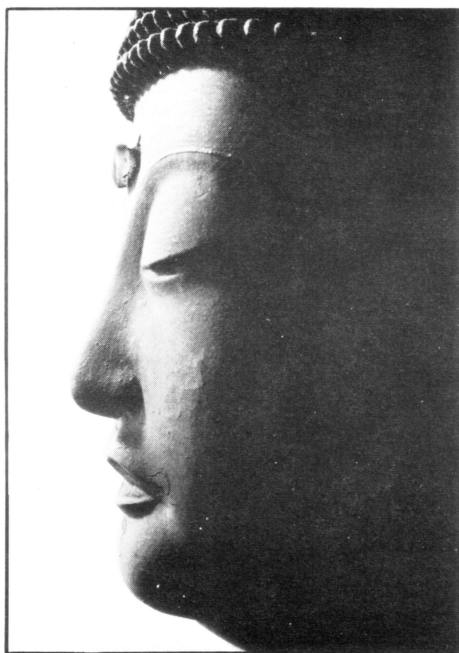
正道の大慈悲

出世の善根より生ず

浄光明満足して

鏡と日月輪の如し

——善導大師のおしえ——



火除の阿弥陀如来

どんな人にも、あわれみの心をもって接していく、これが如来慈悲であります。

苦しむ者、悩むもの、憂うるもの、どんな人にも、その身になってやる。

これが、絶対的な同情者です。

いかに親切な人になっても、絶対同情者とはなり得ません。

世の中には、親切な人は、たくさんいますが、それでも相手の腹の底までわかってしまうと、愛想をつかし、みむきもしなくなってしまう人が多いようです。

ところが大悲の如来は、絶対同情者で、私たちの腹の底まで、知らしめて、それを咎めず、無理がないように、みちびいて下さるのです。

その絶対同情者が、仏であります。同情者であるならば、一歩でも「み仏の心」に近づきたいものです。

もし人善根無ければ

仏名を聞くことを得ず

憍慢きょうまんと弊へいと懈怠けだいの者は

この法を信ずること難し

——善導大師のおしえ——



禅林寺釈迦三尊

釈尊が、耆闍崛山という山の中で、一万人以上の聴衆を前にして説法しておられたとき、説法が始まってまもなく、もう自分は、悟ったのだと思いこんでしまった人々が、つぎつぎに座を去っていつてしまい、その数は、数千人におよんだと言われています。

憍慢とは、うぬぼれている人のことで、その時、釈尊は、「そういう人々こそ、説法を聞いてもらいたい。」とおおせになりました。

いくら尊い、すぐれた教法であっても、それを受け入れていくのは、私たち自身です。

自分に、うぬぼれや、よこしまな考えをもち、なまけていては、教法をほんとうに受け入れることはできないのです。

自分自身が開かれてこそ、はじめて仏に出合うことができるのです。

其れ、彼の阿弥陀仏の名号を

聞くことありて

歡喜して一念を至せば

皆、まさに彼国に生ずることを得。

——善導大師のおしえ——



禪林寺食堂大黒天像

私たちは、朝起きて、顔を洗うことによって、一日の生活が始まります。しかしながら顔を洗う習慣は、もっておりませんが、心を洗う機会にはなかなかめぐりあえず、日夜忙しい生活を送っています。

法悦の機会に恵まれずにあれこれ迷って、日々を過していることは、潤いがない生活です。

阿弥陀仏が、十劫の昔に我々衆生の往生を約束されて、仏になられた大悲の本願を知らされたとき、始めて合掌の生活、すなわち法悦に心を洗う仏恩報謝の生活ができるのです。死んでから往生するためのみに、念仏するものでもありません。

この世で、法悦にひたる喜びに合えることが、より望ましい念仏生活なのです。



禪林寺食堂蓮華台大黒天像

同行、相親しみ、相離るゝこと莫^{なか}れ、

父母妻児、百千万なれども、

是れ、菩提の増上縁に非ず。

——善導大師のおしえ——

信仰心を確立するためには、先ず、何よりも志を同じくする同行者が親密な結束を維持し、強化しなければ、信仰の深化向上は望めないものです。盲愛に陥りやすい親子関係等にある血族は、清浄な信仰心の向上には殆んど役に立たないと言うだけではなく、かえって阻害する場合が多いということを経記すべきであると、思います。

この同行者も血族も、共に私たちにとって大切なことは勿論でありますが、真の念仏の行者は「いぎ二者択一」と言う時点では、前者を選ぶことによって、信仰心の向上を望むことができるのです。

念仏する者は

即ち是 人中の好人なり

人中の妙好人なり

人中の上上人なり

——善導大師のおしえ——



禅林寺画仙堂の紅葉

念仏とは、心に仏を持つということ
であります。心に魂を入れることで、
その魂とは念仏という魂であります。

「あれば鳴る無ければ鳴らぬ鈴の玉」
と、鈴の鳴るのは鈴の中に玉があるか
らであります。今お互の心の中に仏を
持つということは丁度鈴に玉が這入っ
ていることでもあります。即ち念仏の人
は、念持仏の人であり心に仏を持つ人
であります。

仏様は慈悲深重のお方であります。
従って念仏申す人は、慈悲の人であり、
慈悲の人は慈心相向、仏眼相看の妙好
人であります。

この人は、人格が一段と進歩発達し
た向上の人であり、希望の人であって、
人中の上上人であります。